
硝子の殻を破って

密 麻容

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

硝子の殻を破って

【Nコード】

N0142P

【作者名】

密 麻容

【あらすじ】

社会人になって2年目。

変わらない日々の中、出逢った少年。

それが変化の始まりだとは思わなかった。

真弓夏目の一人称です。

1 その出逢いは

しんと静まる法廷の中、少年はいた。

無意識に手の中の鍵を強く握り締めていた。チャラと音がしたが、少年がそれに気付いた様子はない。

今日は特に珍しくもない窃盗の事件が何件か入っていただけで、傍聴人は少年一人だった。そのため、廷吏として法廷に入っていたとき少年に気が付いていた。それだけが理由ではなく、少年の容姿に目を奪われたというのもあるけども。

一番後ろの真ん中の席に姿勢よく座った少年は学ランを着ていて、その上にある顔は綺麗すぎると言っても過言ではなかった。日本人形のような、整った顔。色は白く、髪はさらりとした烏の濡羽色で、瞳も同色だった。その目はずっと被告人に注がれていて、それは事件ごとに被告人が変わっても同じだった。

今日ある期日が全て終わり、法廷の鍵を閉めようとして中に入ると、まだ少年が席に残っていた。少年は何か考え込むように顎に手をつき、少し俯いている。

声を掛け辛い雰囲気だったが、これも仕事だ。ゆっくりと少年の側に立った。少年は近寄って掛かった影に気付いたのか、さっと顔を上げた。

「すみませんが、鍵を閉めますので」

「ああ、すみません」

さっと立ち上がった少年は隣の席に置いた鞆を取り、ドアへと向かって歩いていった。一つ一つの動作が優雅で、無意識に少年を目で追っていた。

少年はドアに手を掛け、開ける前に振り返った。自然と、目が合う。

「一つ聞いてもいいですか？」

「何でしょうか」

「あなたは孟子の性善説を採りますか？ それとも荀子の性悪説を採りますか？」

突然の少年の質問に、返す言葉が瞬時には思い浮かばなかった。ここでの質問といえば裁判のことだと思った。少年がずっと傍聴していたということもあり、先入観がある。しかし、少年から発せられたのはそういったものではなく、問答の議題のようなものだ。

少し遅れたが、それでも答えた。

「えっと…僕は性悪説を採ります」

意外、というような表情を浮かべた少年に苦笑した。

人間の本性は悪である。それを採るということは、人間を悪いと看做していることになる。公正であるべき裁判所職員の言葉でないかもしれない。

少年は表情を改め、しっかりと向き合った。瞳が交差する。

「何故、そちらを？」

「初めが善くて、それから悪くなっていくより、初めは悪く生まれ、それから優しく、道徳を持つようになる。そう思いたいんです」

端的な答えに少年は驚いていたが、すぐに笑みに変えた。その少年の笑みに息を呑んだが、少年はそれを気にせずにドアを開けた。廊下から漏れる蛍光灯の光が少年の顔を照らす。少年はそのまま足を踏み出し、振り返らずに告げた。

「いいね、その考え方。気に入った」

くすくすと笑いながら去っていく少年に、その場から動くことができなかった。

突然言葉を崩した少年。何が起こったのか、よくわからなかった。ただ、自分の考えが認められたことだけはわかった。甘い、と言われがちな答え。それでも、それしか思いつかなかった。環境が人を変えていく。それだけは実感していた。

「僕は蒼井神威^{あおい かむい}。くすんだ蒼に、井戸の井。名前は神様の威厳だよ。覚えていて」

遠ざかっていく足音に混じって、はつきりと聞こえた声。思わず、

くすつと笑みが漏れた。

忘れられるはずがなかった。蒼井さんの存在は確実に記憶に残っている。まだ思い出せる容姿に口元を緩め、鍵を閉めるべくドアへと向かった。

鍵を閉め、法廷の中を通って帰ろうとしたが、ふと蒼井さんが座っていた席にハンカチが残っていることに気付いた。バーバリーの紺のハンカチ。いかにも彼らしいその趣味に、また会う機会があるかもしれないと、一人微かに笑った。

仕事には波があった。忙しいときは半端ではなく、暇なときは中途半端に暇だった。暇というよりも、急ぎの仕事がない、というのが正しいかもしれない。今は後者で、近くにあった本を手に取った。普通より速いペースでページを捲っていると、横を通りかかった女性、宇野さんは、くすりと笑った。

「相変わらず、仕事が速いわね。適当に読んでるように見えて、内容はきちんと頭に入っているし？」

「活字は好きなんですよ。仕事に関しては、役不足だったらいいのですが」

言外に含まれた謙遜がわかったらしく、宇野さん苦笑した。

仕事の量は決して少なくはない。多いと言っていいほどの量を、その速読を活かして手早く処理していた。それを、隣の席に座る宇野さんが見ていることは知っていた。

「本当に役不足ね。じゃあこれ、お願いできるかしら？」

「はい。受付ですね」

読んでいた本を横に置き、宇野さんから書類を受け取った。流し読みで大体の内容を把握した後、左手に鉛筆を持ち、軽く回してから書類へと向けた。必要事項の記入、請求の趣旨・原因とチェックしていく。紙に注意事項を書く音と、宇野さんのパソコンを操作する音。来客の応対をする職員と、宇野さんのようにパソコンで何か

を打っている人。無駄な音がなかった。

その中で、電話特有の機械音が鳴り、反射的に一回のコールで受話器を取った。隣にある電話は宇野さんと兼用で、宇野さんは会話を耳に入れていたようだったが、ちゃんと手は動いている。

「はい、裁判所です」

『申し訳ありませんが、法廷の傍聴席で忘れ物をしてしまつて…』

受話器から聞こえてきた声に、微かに口元が緩んだ。声に聞き覚えがあり、話の内容から蒼井さんである事は推測された。

「はい、お預かりしております。蒼井さん、ですよね？」

『えっ… ああ、性悪説の人？ びっくりした。電話だと、全然声違うんだ？ まあそれはいいとして、また明日取りに行くから、置いておいてくれる？』

僕だとわかつた途端に言葉を変える蒼井さんに、不快に思うことなく答えた。

「わかりました。では明日取りに来られる、ということでは？」

『うん、ありがと。では失礼いたします』

最後は丁寧に挨拶をした蒼井さんに対し、失礼します、と返して静かに受話器を置いた。

始終会話を聞いていた様子の宇野さんは、パソコンを動かす手を休めず、目を画面に向けたままで、受話器を置く音を合図に声を掛けてきた。

「電話の人、知り合い？」

「いえ、今日傍聴していた人です。忘れ物をしていて」

「ああ、あの綺麗な子？ 名前まで知っているの？」

宇野さんは、僕が『蒼井』と相手の名前を呼んでいたことを指摘した。ただ傍聴していた人物ならば、名前を知る機会はない。

宇野さんに苦笑し、左手に持つ鉛筆をくると回しながら答えた。

「向こうが言つたんです。僕は教えていませんが」

そのため、蒼井さんは一言も名前を呼ばなかった。特定するため

に、『性悪説の人』とは言っていたけれども。

宇野さんはキーボードを叩いていた指を組み、少し間を置いてから視線を向けた。その目を見返す。

「あまり深入りしないようにね。事件関係者かもしれないし」「はい」

宇野さんの言葉に、素直に頷いた。確かにあまり関わり合うことは得策ではなかった。出逢った場所が場所だけに、事件関係者であることは可能性として高い。蒼井さんの傍聴が全ての事件に対してであつても、最後の事件を待つために最初から見ていた可能性もあるし、最初の事件を見て、そのまま最後まで見てしまっただけかもしれない。可能性はゼロではない限り、在り得る。

蒼井さんとの会話で事件関係者ではないような気がしたが、それでも気をつけるに越したことはない、と気を改めた。

2 偶然か必然か

「すみません、忘れ物を取りにきたのですが」

部屋の入り口から聞こえた知っている声に、椅子から立ち上がった。入り口に立っていたのは昨日と同じように制服を着た蒼井さんだった。しかし、眼鏡を掛けていて、少し顔の印象が変わっている。端整な顔立ちを隠すような、細い銀のフレームの眼鏡。それは彼の容姿を知的に見せ、少し綺麗さを失わせていた。

カウンター越しに蒼井さんと向き合い、ハンカチを差し出した。

「忘れ物はこれですか？」

「ありがとうございます。えっと……いえ、これで失礼します」

蒼井さんはハンカチを受け取ると、すぐに踵を返して出て行った。終始丁寧な態度を崩さなかった蒼井さんに違和感を覚えながらも、席に戻った。隣の席にいた宇野さんはずっと視線をこっちに注いでいたようだった。

何か変なところがあったのか。軽く首を傾げた。その動作に宇野さんは軽く首を横に振り、手元の書類に視線を落とした。

「何か引つ掛かるけど……まあ、いいわ。これで接触はなくなったんだし。真弓くん、今日中にこれ出来る？」

これ、と差し出した書類は20枚ほどあり、仕事の内容から時間が掛かるものと予想できた。しかし、今日中ということより、断ると宇野さんがその分残業することが決定している。

現在の時刻は終業時間の10分前。それでも終業時間を少し過ぎるくらいの時間で終わらせることが出来るだろう。快く引き受けた宇野さんはほっとした顔で書類を渡し、自分の仕事に戻った。側にあつた受付印を全ての紙に押し、それから内容を確認していった。その作業が終わったのは、終業を知らせるチャイムが鳴ってから30分後のことだった。

定時を過ぎると正面の門は閉まっている。裏門から出て、正門前の大通りに出る道へ向かって歩いていった。風が少し冷たく感じる季節になっている。首筋から冷気が入ってきた。少し肌寒さを感じながらも、姿勢良く歩いていった。背中を丸めると、癖になりそうだ。

夕日が完全に沈み切る数分前、という状態の空はグラデーションが美しく、空を見上げながら歩いていった。近畿地方の田舎に当たる地域だから、空気は澄み、空は綺麗に見えた。人にぶつからないようにと視界には入れていたが、神経は空にいつていた。

「…無視？」

横から聞こえた声に、顔を戻して横へ向いた。そこに立っていたのは蒼井さんだった。腕を組んで、壁に凭れかかったままの姿勢で無表情に見ている。

蒼井さんに気付かなかったことが、彼の気分を害したことを察し、頭を下げた。

「すみません。空を見ていたので、気が付きませんでした」

「空？ ああ、綺麗だね。空を見ていて気付かなかったならいいよ。思いつきり無視されたと思った」

思いつきり、と語調を強めて言った蒼井さんに苦笑し、もう一度すみません、と謝った。その謝罪に満足したようで、蒼井さんは軽く僕の袖を引っ張り、歩くよう促した。それに素直に従い、蒼井さんの隣に並んで歩いた。

その時になって初めて、蒼井さんが自分より少し背が低いことを知った。目線が少し低く感じる程度であるため、数センチの差であることがわかる

「何をしていたのですか？」

「待ってたに決まってる」

「誰を？」

蒼井さんは顔を顰めた。心底わからない、という顔をすると、蒼

井さんは呆れたように溜息を吐いた。

それから失笑した。

「あなたを、だよ」

「僕を？ 何故？」

また疑問で返すと、蒼井さんは立ち止まった。合わせて歩くのを止める。

彼の真意を図り損ねた。疑問が疑問を呼ぶ。蒼井さんが待っていた理由がわからなかった。用があるなら、あの忘れ物を渡したときにでも言っているはずだ。

蒼井さんは笑い、僕の顔の前に人差し指を立てた。

「あなたの名前を知りたかったから。それが理由」

「それなら、先ほど聞いてくだされば…」

「女の人がじつと見てたからね。言えなかった。教えてくれるの？」
忘れ物を渡すときに聞けなかった訳は宇野さんが原因だったことに、困ったように笑った。宇野さんの言葉が頭を過ぎる。接触はなくなっってなんかいなかった。

丁寧な言葉話さない蒼井さんに、少し嬉しく思った。少し距離が近い感じがしたが、不快ではない。

「僕は真弓夏目です。字は真実の弓に、夏目漱石の夏目です」

「真弓さん？ 名前と名字が逆みたいだね」

蒼井さんの感想に苦笑した。

いつも言われる感想だった。夏目は夏目漱石を連想させ、名字の印象が強い。それに加え、真弓は女性の名前によくあり、幼少時にはそれでからかわれたりもした。しかし、真弓という名字はそれほど珍しくもなく、夏目は『棗』、『夏芽』などという漢字で名前に使用されていることもある。しかし、こちらも女性に多い。

この名前は従兄と同じものにした、と両親に告げられたこともあり、気にしていなかった。同じ名前の『真弓夏目』がいる。名前に特別なものを感じなかった。自分だと分かれば、それで良い。

蒼井さんは立てていた人差し指を回し、くすりと笑った。

「でも、合ってるね。夏目さん、で良い？」

合っている、という言葉に揶揄は含まれてはいなかった。ほっと息を吐いて頷いた。

「はい」

「で、僕は『神威』、ね」

「…神威さん」

「うん」

神威さんは止めていた足を動かし、先へと進んでいった。それを、後ろから追い掛けるように隣へ並んだ。

神威さんは歩きながら顔を僕に向け、楽しそうに話しかけた。

「ハンカチを取りに来るために、ここに来たと思う？」

「そうじゃないんですか？」

くすつと笑った神威さんに、首を傾げた。

学校帰りに寄る用がある場所ではなかった。神威さんの制服に付けられた学章から、裁判所の管轄地域ではあるが、かなり離れている高校に通っていることを知っていた。そんな所から来る理由は、忘れ物を取りに来た以外には考えられない。

神威さんはポケットからハンカチを出し、掲げて見せた。

「このハンカチなんてどうでも良かった。取りに来るくらいなら、そのまま捨てて欲しかったよ」

「では、何故取りに来られたのですか？」

わからない？ と目で合図する神威さんに頷いた。ブランド物のハンカチであり、その上大切に使われているようだったので、それ以外の理由は思いつかない。捨ててもいいと言うハンカチを取りに来た理由はどこにあるのかと、神威さんを見ることが答えを促した。

「あなたに会うためだよ、夏目さん」

「僕に？」

「そう。『性悪説』を採った、あなたに興味があつてね」

法廷で交わした会話を思い出した。

性善説か性悪説か。性悪説を採った理由が気に入ったと言った神

威さん。そして名前を覚えていてと言った。

その光景を思い出し、薄く笑った。

その笑みに神威さんは軽く笑い返し、手に持っていたハンカチを僕の頬に当てた。

「いつも適当な答えしか返ってこなかったからね。適当でなくても、軽すぎた。でも、夏目さんは真面目に答えてくれた。予想と違って、興味深かったよ」

神威さんは一歩近付き、顔を寄せた。近付いた彼の顔を綺麗だな、と思いながら動かなかった。

眼鏡越しでも分かる容貌。パーツの配置が絶妙で、それに見合う大きな瞳と輪郭と髪。本当に容姿端麗、眉目秀麗とはこういう顔を言っと、今更ながら実感した。

神威さんはまったく動じない僕に優しい笑みを返し、軽く頬に唇を付けた。

「そんなに見ないでよ。僕は人形じゃない。見物料は頂いたよ」

突然のキスに固まった。綺麗な顔が近付いたと思ったら、頬に柔らかな感触があった。その正体がわかった途端、彼の体を押していた。抵抗することなく、神威さんは離れた。彼はそのまま後ろに下がって、微笑んだ。

「…何するんですか」

「だから見物料だって。今日は来た甲斐があったよ。有意義だった。ハンカチはあげる」

言いたいことを早口に言い、じゃあね、とハンカチをスーツのポケットに入れ、手を振って神威さんは駅の構内へと走って行った。

その姿が見えなくなるまでその場に立っていた。

何かなんだかわからない。

頬に手を当て、神威さんの唇が当たった箇所をなぞった。何を思っただけが行動に出たのかわからなかったが、それを何とも思わなかった。嫌でもないし、嬉しくもない。

そんな自分に呆れた。感情が乏しすぎる。

気持ちを切り替え、彼の後を追うように、駅へと歩いていった。
ポケットからはみ出たハンカチが、記憶に彼を刻み込ませた。

3 また出逢う

仕事の量が急激に増えた。社会の情勢がそうさせたといっても過言ではない。手を止める暇もなく、書類を捲っていった。申立書と添付書類、費用その他諸々のチェックを順にこなし、注意する箇所は付箋を付けて記録を編成し、隣の宇野さんに回した。

1つが終わると、横に積まれた同じような書類を手元に移動させる。そんな作業が何時間も続いた。

「真弓くん、あとどれくらいある？」

「あと3件です」

「…わかったわ」

横に積まれていく記録を見、宇野さんは溜息を吐いた。それを誰かに恨み言と言っわけにもいかず、それを消化する以外に逃げ道はない。

一番下にある記録を取り、宇野さんは書類に目を通していった。

「今では、破産するのは恥ずべきことじゃなくなってきたわね」

「そうですね。今の状況では仕方のないことかもしれません。意思の弱さもありますが、それだけではありませんし」

最後の書類を宇野さんに渡し、首を前後左右に振って凝りを解した。小さくコキツとなる音が宇野さんに聞こえたようで、宇野さんは苦笑した。

「宇野さん、他に何かありますか？」

「んー今は、ありません」

宇野さんはざっと周りを見、渡す仕事がないことを確認した。

机の上に何も残っていないことを確かめると、席を立て廊下を挟んだ所に位置する係へと向かった。

小さな支部では、一つのフロアに全ての係が存在している。僕の仕事は破産が主だが、他の係の仕事も手伝うことがあった。今回も手伝いに、刑事の係へ声を掛けた。

「何か手伝えることはありますか？」

「報告するものがあつたはずだから、それをお願いできるかな？
締め切りは一週間後だから」

二つ返事で承諾し、USBを預かった。

中身はわかつている。皆があまりやりたがらない仕事で、締め切りになつて慌てる種類のものだ。しかし、そういった仕事が好きだった。単調な作業だから嫌われているのだけど、そこがいい。

戻つて椅子に座ると、目の前が一瞬揺れたように思えた。それを深く息をすることで、回復させた。知らない内に、疲れが溜まつている。自覚した途端に肩が重く感じられた。上を見ると時計が視界に入り、終業時刻の10分前だとわかった。

USBをロッカーに入れ、終業時間が来るまでペンで書類を作成していた。パソコンの電源は切つたので、原始的かつ小部数を作るのには効率的な方法を使う。書く内容がすんなりと頭に入つていった。

「真弓くん、大丈夫？」

宇野さんの呼びかけに少し反応が遅れたが、動かしていた手を止め、宇野さんに微笑んだ。心配いらない、と言外に匂わせ、宇野さんは諦めの溜息を吐いた。

暫くして終業を知らせるチャイムが鳴り、筆記具を机の中に入れて席を立つた。ふら付かないことを確認し、鞆を持って宇野さんに一礼する。

「お先に失礼します」

「お疲れさまでした。ゆっくり休んでね」

素早い行動に、僕が疲れていたことを察した宇野さんは、労いの言葉と共に笑顔を向けた。

その笑顔に困つたように笑みを返し、もう一度軽く礼をし、さつとドアへと向かった。

段々と体が重くなってくるのを感じた。歩く度に、肩に重りが載っているような感覚がした。

何とか駅まで着いたのはいいが、電車に乗っていると気分が悪くなった。降りる駅を確かめると、まだ5つも先だ。胃液が逆流してくるような唾液の分泌に、仕方なく降りる予定の駅の2つ前の駅で降りた。

幸い、降りる人は少なかった。数日前、帰りの電車の中で神威を見かけた駅だ、と心の隅で思う。

電車が揺れる感覚から逃れたために気分は落ち着いていたが、次に頭痛が襲った。内臓系の痛みや打撲、切り傷には強かったが、頭痛だけは苦手だった。思考能力が低下すると、とても不安になる。少しでもマシになるようにと額に手を当てたが、手の平に冷や汗を感じるだけだった。目を閉じ、力無く近くの壁へと凭れ掛かった。

「夏目さん？」

後ろから掛かった声に振り向くことは出来ず、聞いたことのある声に反応して目を開けた。彼を数日前にこの駅で見かけたただけで、会うことは可能性としてはあったが、ゼロに近い確率だった。

後ろからその人物が近付くのを感じ、ふっと目の前に予想していた顔が現れた。容姿に合った声の持ち主。

「やっぱり夏目さんだ。どうしたの、こんなところで」

「…神威さん。少し眩暈がして…」

擦れた声に片方の眉を上げた神威さんは、顔色を確かめるかのように覗き込んだ。

冷や汗が喉を伝う。状態が悪化していることはすぐにわかったようで、神威さんは鞆からハンカチを出して僕の頬に当てた。

「夏目さん、歩ける？ 僕の家、すぐそこだから休んでいいかない？」

「そんな、ご迷惑では…」

「迷惑だったら、救急車呼んで帰ってるよ。どうする？ 夏目さんが良ければ」

神威さんの誘いに、最善策を考えた。

このままの状態でも良くはならない。悪化するのは確実だった。救急車を呼ぶというのも考慮に入れたが、連絡がいくのは祖母のため、迷惑をかけたくなかった。迎えに来てもらうのは気が引ける。

結果、神威さんの好意に甘えるのが、今採り得る一番の良策だった。

「では済みませんが、少し休ませていただきます」

「うん、じゃあ早く行こう」

片腕を組んで歩き出す神威さんに、戸惑いながらも大人しくついて行った。歩くペースは僕のことを考えて遅く、神威さんは体重を支えるように腕に力を入れていた。

そんな彼の配慮に思わず安心し、大人しく体を預けた。一歩ずつ階段を下り、確実に進んでいく。改札口を抜け、定期券を鞆に入れたのを見て、神威さんはその鞆を受け取った。さり気ないその仕種に、安堵の息を吐いた。

そして、糸が切れるように意識を手放した。駅を出てから数十メートルの位置だった。

4 その意味を

「ここは？」

目が覚めて、広がる世界に呟いた。

少し重たく感じる体をゆつくりと起こす。もう頭痛は治まっていた、冷や汗も引いていた。スーツの上着は脱がされていて、横の壁に掛けてあるのに気付いた。シャツのボタンも上の二つが外されていて、寛げである。

視界に入るのは淡い青色の壁に、同色のカーテン。今、まさに寝ていたベッドは無地の薄い緑で、寒色系の色で統一されていた。学生らしい本棚と机があり、ぽつんと置かれたオーディオ機器が立派に見えた。収納スペースは壁にあり、外に出ているものはそれくらいだった。空間が広く感じる。

漂う空気はどこかで感じたことのある匂いを含んでいて、記憶を探ろうとした。

「気がついた？」

唯一のドアから入ってきたのは神威さんだった。前後の記憶が戻り、狼狽した。

途中から意識がなくなったということは、ここまで運んできたのは神威さんということになる。意識のない人間は重く、迷惑をかけたことが嫌でもわかった。

僕がきつくシーツを握り締めているのに気付いたのか、神威さんはその手にそっと触れた。彼の手に、体が震える。

「どうしたの？ まだ頭が痛い？」

「いえ、頭痛の方は大分マシです。それより……」

謝罪を神威さんは手に触れていた片手で遮った。反対の手にはポットとカップが載ったお盆があり、それをそっとサイドテーブルへと置いた。陶器の擦れる音が微かにした。

神威さんは片目を瞑り、悪戯っぽく笑った。

「『すみません』はなしだよ。謝罪より感謝の言葉が言う方も、受け取る方も気分が良いよね？」

神威さんの口だけの笑みに、くすつと笑った。
確かに謝られるよりも、お礼を言われる方が良い。迷惑を掛けたとわかるなら、相手のことも考えるべきだ。

無意識の内に神威さんが触れていた箇所を手で触っていた。

「…そうですね。有難う御座いました。助けていただいて」

「どういたしまして。電話だけの所見だけど、父によると過労が原因じゃないかって」

神威さんはベッドの横に椅子を持ってきて、座った。それからポットから紅茶を注ぎ、手渡した。

それを受け取り、一口飲んだ。ダージリンは好きな種類であり、疲れた体に沁みていく。

首を傾げて補足説明を促した。その仕種で理解したのか、神威さんは口に残る液体を嚥下してから話した。

「父は医者なんだよ。外科医なんだけどね。僕が電話で夏目さんの容態を説明して、過労だろうっていう結論になったんだ」

神威さんは簡単に言っただけだが、誰でも出来ることではなかった。

まず、容態を正確に伝えることさえ難しい。それなのに、結論が出るほどの説明をして、それが外れていないことはよくわかっていた。

神威さんを優しく見た。その表情に彼は一瞬驚いた顔をしたが、すぐに口元に笑みを浮かべた。

「夏目さん、体調管理が出来ていそうなのに、何故こんな状態になったの？」

「最近よく眠れていない上に、今日は、休憩を取らずに5時間続けて仕事をしていたからでしょうか…」

「夏目さん！ 集中力は切れたとき、一気に疲れがくるんだから！ 気分悪くなるのは当たり前だよ！」

小さな声で言った理由に、神威さんは呆れたように声を荒らげて返した。その様子に呆気に取りながらも素直に頷き、非を認めた。体調管理が出来ていると評価されていたにも係わらず、裏切る形になつてしまった。

俯いて反省した。神威さんはカップを机に置き、声音を変えて耳元で囁いた。

「心配したんだからね。本当に予想外だよ……」

耳に当たる息がくすぐつたくて身を擦ると、神威さんは肩をそつと押してベッドへと倒れ込ませた。

まだ休養が必要だった。少し眠つて、それから水分補給をしたために少しはマシになっているが、それでも完全ではない。大人しく頭を枕に沈め、視線だけを神威さんに向けた。

「僕を運ぶとき、重くはなかったのですか？ 神威さんよりは重いと思うのですが」

「力があるからね。こんな顔だと、いろんな奴が寄つて来るから。自分の身を護るためにね、力はあるよ」

神威さんは袖を捲つて腕を晒した。無駄な脂肪がついていない、すらりと伸びた腕。少し力を入れているのか、筋肉の形がはっきりとわかった。

僕も運動神経は良く、自分を護る程度の技術は身につけていた。そのため、神威さんの努力がわかる。

神威さんは袖を伸ばして腕を隠し、カップを取つて顎に当てた。

「夏目さん、聞いていい？」

「何をですか？」

「どんな仕事をしているのかなつて。それだけ疲労が溜まるほどの仕事なんでしょう？」

神威さんは足を組み、その上に片腕を置いてその腕に反対のカップを持っている手の肘を置いた。

優雅に見えるその仕種を、鑑賞するように見た。神威さんはその視線に不快を感じていないようで、ふつと微笑んだ。

その笑みに問いを思い出し、答えた。

「破産の仕事が主です。でも、たまに刑事の仕事を手伝ったりしています」

「ああ、それで廷吏の席にいたんだ？」

頭の回転が速い神威さんに、軽く顎を引いた。その動きに前髪が目についた。

それを払おうとした僕より先に神威さんの手が伸び、優しく横へと退けられた。

神威さんは一瞬驚いた表情をしたが、すぐに笑みに変えた。

「病人なんだから、大人しくしてること！ えっと、仕事の話だと込み入った話は出来そうにないし……。そういえば、なんで夏目さんは敬語で話すの？ 僕が敬語を話さなくても何も言わないけど。壁作ってる？」

首を横に振った。否定を示すその動作に神威さんはほっとしながら、僕の髪を梳いた。

神威さんに髪を退けられることに、視界は開けてくる。それは内面的なもので、実際に見えているものは何も変わっていない。

不思議と安心する空間に、表情は少しずつ解れていった。

「この話し方は、誰にでも同じなんです。仕事でも、私用でも。昔からの癖みたいなものだと思うってください。神威さんが敬語を話さないのは、別に僕を蔑んでいるわけではないですよ？」

「当たり前。これが僕の話し方。まあ、いつもはもっと口調がキツイけどね。夏目さんには必要ないキツさだし」

あはは、と笑った神威さんに、くすりと笑った。

話していると、気分が段々と良くなってきているのがわかった。そつと体を起こし、冷めてしまった紅茶に口を付けた。冷たい液体が喉を通るのが気持ち良い。音を立てないように、カップをお盆に載せた。

それに合わせて、神威さんはカップに残る紅茶を飲み干し、お盆に置いた。

「さて、と。夏目さん、これからどうする？ 帰る？」

「あの、この後のご予定はありますか？」

お盆を持って立ち上がった神威さんを引き止めるように声を掛けた。

彼は首を傾げた。

「ん？ お誘い？」

「はい。夕食と一緒に如何でしょう？ 迷惑をかけてしまったのは確かですし」

「気にしないでいいのに。でも嬉しい。喜んでご一緒させてもらうよ」

神威さんは部屋を出て行き、茶器を置いてからまた戻ってきた。ベッドから降りて、壁に掛けられたスーツに腕を通しているところだった。神威さんも出掛ける準備をして薄い黒のシャツを羽織った。神威さんは家に着いてから、制服からモスグリーンのタートルネックの服に着替えていた。足の線が見えない程度のゆったりとした黒いパンツに合う。彼の容姿を考えれば、基本的に服は何でも合っていた。

きつちりとスーツを着こなし、ハンカチで軽く浮かんでいた頬の汗を拭いた。

「そのハンカチ。使ってくれているんだ？」

「せっかくいただいた物ですし。紺のスーツに合うので良かったです」

神威さんは前と同じように、ハンカチを奪って僕の頬に当てた。前と同じ感触に、笑みを漏らした。

神威さんは不思議そうな顔をしたが、なんでもないと手を振った。

仕度が整ったことを確認し、僕が先に出て神威さんは家の鍵を閉めた。

錠の落ちる音が、静まり返った廊下に響いた。

5 知りたいのか知りたくないのか

「夏目さんはフロイトとユング、どっちが好き？」

神威さんは、器用にパスタをフォークに巻き付けた。

いきなりの質問だった。とりあえず、口に入れた物を咀嚼しながら考えた。

どちらも心理学者。ユングはフロイトの考えに共鳴していたが、その後にフロイトの学説を批判し、独自の分析心理学を創設したはず。フロイトの解釈は、人間の心理生活を、潜在意識の領域内に抑圧された性欲衝動性的衝動の働きに帰す、つまりは全てに性が結びついていくように思え、あまり好きではなかった。

口に入っているものを全て飲み込み、神威さんと視線を合わせた。「僕はユングですね。フロイトの解釈は性的なものが多く感じられますので、あまり好きではないんです」

僕の答えににっこりと笑って、神威さんはフォークを口に運んだ。この答えで良かったのか、首を傾げると、神威さんはフォークで円を描いて弾んだ声で言った。

「やっぱり夏目さんはイイね。すぐに理解してくれる。じゃあさ、帰納法か演繹法、どちらが好き？」

スープを掬う手を止めて考え込んだ。

どちらも推理方法。帰納法は、個々の具体的事実から一般的な命題、法則を導き出す方法だったはずで。その反対で、演繹法は前提を認めるなら結論も必然的に認めざるを得ない方法、か。

神威さんはもぐもぐと口を動かしながら、答えを待った。

「演繹法です。数学の証明はこれですよ。僕、数学が好きなんです。だから、といえばそれまでですけど」

「でもさ、消去法もいいよね。Cogito ergo sum（コギト エルゴ スム）」

「I think, therefore I am… 我思う、故

に我ありですね」

うんうん、と楽しそうに頷く神威さんに、満足してもらえたよう
でほっとした。

彼の問いはどちらが良いとは言えないものばかりで、それは個人の好みで決まるものだった。性悪説にしても、ユングにしても、そして演繹法にしても。ただ感覚的に答えていた。最後のデカルトの言葉は消去法ではないが、彼の切り替えしの上手さがわかった。全てを疑って、確かなモノはそれを考えている自分だけ。それは自分に通じるものがある、と喉の奥で自嘲した。

神威さんは料理を綺麗に食べた後、食後にコーヒーを頼んだ。僕はまだスープに手を付けたばかりで、目で彼を窺った。神威さんはそれに気付き、軽く手を振った。

「ゆっくり食べてよ？ 病人なんだから。それにしても、僕の質問に説明なしで全部答えてくれるなんてね。夏目さんって本当……」

神威さんは続く言葉を飲み込んだ。

途切れた言葉が気になり、口を手で隠して少しくぐもった声で聞いた。まだ口に物が残っている。

「神威さん？」

「デザートも食べるね」

突然変わった話題に、訝しく思いながらも咀嚼した物を飲み込んで頷いた。

了承を示す動作に、神威さんはふっと破顔した。話題を変えたことより、続きを言いたくないことがわかった。

少し残ったスープを脇に避け、彼同様コーヒーを頼もうとしたが、彼によって紅茶に変更された。コーヒーは胃に良くない。無理をして倒れたのだから、これ以上体に負担はかけられないか。

まだ完全には快復していないことを自覚した。

神威さんに気遣いに感謝し、そのまま違う話題を振った。

「そつえば神威さんは高校何年生なんですか？ 北高校であることは校章からわかりますが」

「3年生だよ。ちょうど受験生。夏目さんは何歳？」

「今年で23です。裁判所には今年の4月に入っただけです」

「へえ、じゃあ5歳しか変わらないんだ」

どこか嬉しそうに笑う神威さんは、運ばれてきたコーヒーに何も入れずに飲んだ。

コーヒー独特の香りが僕の方にも流れてきて、コーヒーが飲みたくなったがセイロントニーで喉を潤した。確かに体にはセイロンが優しく滲みた。

思いの外疲れていた体にくすりと自嘲気味に笑った。

その笑みに、神威さんは僕の額に人差し指を付けた。

「眉間の皺、気をつけてね。それだけで大分楽になると思うよ」

「…わかりました」

素直に返事を返すと、神威さんは指を離し、その指を自分の唇に当てた。

ふふつと笑う彼はどこか楽しそうで、その指を目で追った。指が辿り着いた先の唇に、思わず出逢ったときの日の出来事が頭を過ぎり、咽た。

僕の様子に見当がついたようで、神威さんは意地悪く唇を指でなぞりながら言った。

「思い出した？ あのハンカチをあげた日のこと。どう思った？」

「何も思いませんでしたけど」

即答し、横にあつた水を飲んだ。気管に入りそうになった紅茶に喉に痛みを感じたが、それでもなんとか呼吸は出来た。

僕の返答に不機嫌になった神威さんは顔を顰め、怒りを含む声音で言った。

「何で？ こんな綺麗な子にキスされたんだよ？ 嬉しいとか、嫌だとか、何か思わなかったわけ？」

「…本当に何も思わなかったんです。驚きはしましたけど。これは昔からなんですけど…理由は秘密です」

彼の口調が棘を含んでいるようで、困ったように笑った。

感想なんてなかった。昔から、感情の起伏はあまりなかった。環境がそれを必要とせず、どちらかといえば不必要な部類に入っていた。

神威さんは深く溜息を吐いた後、何か思いついたように口元に笑みを浮かべた。少し困惑しながらも、紅茶に口を付けたままで彼が何をするのかを見ていた。

「何も思わないのなら、口にしてもいいよね？」

神威さんの誘うようなその言葉に、からかわれているのかと思っただが、彼の顔が近付くことでそれが本気だと悟った。テーブル越しに顔を寄せる神威さんに、彼の額を押すことでその動きを止めた。神威さんは僕の手を払い除けようとしたが、柔らかな笑みに渋々と席に戻った。

「別にかまいませんよ」

「じゃあ何で」

言っていることとやっていることが違う、と神威さんは恨みがましく見た。

笑顔を崩さず、カップを持っていない手の人差し指を振った。

「また不意打ちを狙ってみてはいかがですか？　僕とは、恋人同士のような雰囲気ですものじゃありませんから」

くすくすと笑い、そのまま紅茶を飲み干してカップを空けた。口に残る苦味が、体の疲れを忘れさせる。

神威さんは呆気にとられながらも、悪戯っぽく笑みを浮かべた。

「楽しみにしててよ。不意打ちは、突然訪れるんだから」

彼はコーヒーを一気に飲み干した。それを合図に、先に席を立ち、出口へと向かった。僕が伝票を持つのに神威さんは少しばかり抵抗したが、「治療費」という名目に、渋々了解した。

僕が選んだレストランは、美味しいと評判の店で、決して安くはなかった。神威さんは奢られるのには慣れているだろうに、困ったような表情を浮かべていた。

「…ありがとう」

「どういたしまして」

ぼそりと、しかしながらはつきりと言った神威さんに、大人の笑顔に向けた。

鍵を回して錠を外し、玄関のドアを開けた。

一人で暮らすには十分なスペースのあるマンションの部屋には、冷たい空気が漂っていた。部屋に入って暖房器具のスイッチを入れ、部屋を暖めた。人工的な温かい空気が流れる。温度を調節してから風呂場に向かい、湯を張った。蛇口から湯と共に吹き出る蒸気が、疲れて乾燥した肌に当たるのを気持ち良く感じ、脱衣スペースで服を脱ごうとした。

ポケットからハンカチを取り出したとき、ふと彼の看病を思い出した。看病は、親には与えられなかったものの一つだった。病気のときは病院に連れて行かれ、処方された後は一人で寝かされていた。母親はそのまま仕事に出掛け、両親が帰ってくるのは普段と変わらず、深夜になっていた。看病されたり優しくされたりしたことはなく、反対に、病気になるのは自己管理が出来てないと非難されることがあった。熱と薬で朦朧とする意識の中、呆れた表情を浮かべる母親の顔だけが鮮明に思い出された。

しかしそれはすぐに消えて、両親の死後、親代わりとなった高校からの親友の顔が浮かんだ。いつも辛いときに側にいてくれた彼は、今研修で関東に行っている。今は頼れない。呼んだらすぐに来られるが、迷惑をかけたくなかった。

それから、親友の顔は神威さんの心配する表情に変わった。僕の無茶を怒りはしたが、終始体調を気遣っていた神威さん。微かに額に触れた彼の指の感触が、気分を楽にさせていた。

「神威さん……」

ぼつりと口から漏れた声は風呂場に反響し、慌てて風呂に入る準備をした。

浴槽には、湯が溢れそうなほど溜まっていた。

6 それでも僕は

「すみません」

破産受付のプレートが立てられたカウンターの方から声がした。集中していたのか、人が来たことに気付かなかった。いつもとは違う丁寧な呼びかけに、声を発した人物を予想できなかった。

机から顔を上げてカウンターを見て、そこに立つ神威さんに驚いた。一週間ぶりに見るが、彼は相変わらず眼鏡をかけていた。

僕の反応に苦笑した神威さんは、隣に立つ20歳過ぎに見える青年を示した。

紺色に近い青に染めた髪は短く、立てられている。着ている服はどこかに遊びに行くようで、ジーンズは下げられて足が短く見えるものだった。流行なのか、と特に気にすることなく席を立ててカウンターの前に立った。

「どういった御用でしょうか？」

「破産の申し立てをしたいのですが」

神威さんは丁寧な口調で話した。初めて逢ったときの彼を思い出し、少し違和を感じた。いつもの砕けた口調の方が良い。

それでも仕事中であり、神威さんも付き添いで来たことがわかる。そのまま事務的に進めた。

「申し立てられる方は、来られているご本人でしょうか。あと、弁護士に頼まれずにご本人でされるということでよろしいですか？」

「え…うん。俺が破産したくて、自分でやりたいんだけど」

神威さんとは違い、話し方を変えない青年に、緊張を解すように笑みを浮かべた。その笑みに青年は落ち着いていたのか、一息吐いて、カウンターに手を置いた。

「今住んでいる所はどちらでしょう」

「市内」

「では、少し伺いますが、財産はお持ちでないでしょうか。不動産

や車、保険の解約金などで価値のあるものは？」

「家は親父ので、車も親父のだし。保険も掛け捨てだし」

順に懇切丁寧に破産を申し立てるまでのことを説明していく。それを青年の横で見ていた神威さんは、綺麗な姿勢のまま立っていた。突然、宇野さんは破産の申立用紙を手に僕の隣に立った。横から現れた宇野さんに、ほっと息を吐き、青年は呆気に取られた。

宇野さんは30代前半だが若く見え、紺のスーツを着こなしている。肩にかかる髪は染めずに漆黒に輝き、化粧は軽くしている程度だった。神威さんほどではないが整った容姿に、青年は口が開いたままだった。

そして、神威さんは何の感情も込めない目で見ていた。

「これが申立用紙です。この中に説明がありますので、よく読んでお書きください。質問がありましたら、破産係の宇野を指名してください」

につこりと、しかし口調は事務的な宇野さんに、隣で感心して見ている。さすがベテランの域に入ってきているだけのことはある。

気の抜けた返事を返した青年を横目に、神威さんは礼儀正しくお辞儀をした。

「どうもありがとうございます。では、全て書類を揃えてからまた伺わせていただきます」

宇野さんから用紙を受け取った神威さんは、青年を促して歩き出した。

彼の姿が見えなくなるまで、宇野さんはその場を動かなかった。

見えなくなったのを確認すると、宇野さんがぼつりと呟いた。

「真弓くん、平等にね」

宇野さんは一言忠告して席に戻った。微妙な笑みを浮かべて、言葉を反芻した。

宇野さんからの二度目の忠告。深入りしないこと。平等であること。それは裁判所職員として肝に銘じておかなければならないことだった。偏りはあってはならない。

偏りがあつたことは、人生の中で一度もなかった。

神威さんが申立用紙を手に入れてから3日後、彼は青年と共に裁判所を訪れた。神威さんは学校の帰りなのか学生服で、青年はパーカーに使い古されたジーンズという出で立ちだった。

神威さんは破産受付のカウンターの前に立ち、3日前と同様に礼儀正しく振舞った。以前の親しみを込めた彼はいない。一層距離を感じたが、他の人と接するように応対した。心の中では『公平』という単語がちらつく。

「これでよろしいでしょうか」

神威さんは書類と資料を綺麗に揃えてカウンターの上に出した。それを受け取り、ざっと目を通していった。20分ほどで確認し終わり、息を吐いた。

「完璧です。これは余分なのですが、少し補足説明を書いていただけますか？」

示した箇所に、青年は雑な字で乱暴に書いた。なんとか解読でき、意味も通じる。申立書の丁寧な字とは似ても似つかない。明らかに別人が作ったことがわかる書類になったことに苦笑した。作成者は申し立てる本人でなければならぬ。しかし、報酬を受け取らなければ害はない。親族が代筆することはよくあることだ。それを咎めるつもりはなかった。

「では、受け付けます。切手と現金はお持ちでしょうか？」

「はい。内訳はこれでよろしかったですか？」

費用を納める用紙を渡した。それを申立者である青年が書いている間に、神威さんが差し出した封筒を開けた。

中には、切手と一枚の紙が入っていた。その紙に書かれた内容を理解し、さらさらと空いた部分に書き込んで神威さんに返した。紙に書かれていたのは『この後時間ある？』であり、『はい。では6時に駅前で』と返した。

神威さんは紙をさつと読み流し、無表情で頷いた。彼が顔に浮かべたのは無理矢理作ったものだということが、何故かわかった。微笑みを隠しているかのように見える。

受け付けた番号を神威さんに告げ、現金を会計係で納めるように手で場所を示した。神威さんと青年は指した場所に向かうため、カウンターから離れた。

「深入りしないだね」

「深入り、できたらいいですけどね」

僕の返答に、宇野さんはしまった、という表情を見せた。

宇野さんは僕の過去を知っていた。それは僕が言ったのではなく、採用されて共に働くことになってから数カ月後に、裁判所に挨拶に来た祖母から聞いていた。

両親の影響を強く受け、その両親は高校生の時に交通事故で死んだが、それでも僕の内面に深く関わっている。両親がいなくなつてから一人で暮らし、祖父母と離れたところに住んでいるが、定期的に連絡は取っていた。両親の代わりになる親類は祖父母だけだった。僕にとっての本当の親代わりの存在を、祖父母は知らない。

その宇野さんに対して苦笑いをし、机の上に広げた書類を整理していった。

気にはしていない。自分の生い立ちが特殊であることは知っていた。深入りしようにも、人との接し方がよくわからない。八方美人のように見えるのは、表面的な付き合いだけだからであり、宇野さんの発言で何も思わなかった。

「深入り、した方がいいのね」

ぽつりと漏らした宇野さんに、顔を宇野さんへと向けたが、宇野さんは考え込んだまま、椅子を自分の席へと戻した。

帰宅時間のため人通りの激しい駅前に、6時5分前に着いた。流れる人の波の中の、特定の一人を探すのは困難に思えた。

自分のミスに溜息を吐いた。会えないかもしれない。人の流れの邪魔にならないように、少し駅から離れた所に立った。

「夏目さん！」

近くから聞こえた声に、振り向いた。そして、軽く唇に何か触れた。その正体がわかったのは、目の前の彼を認識してからだった。

「…神威さん」

「何、不満？ 不意打ちを狙えて言ったのは夏目さんだよ」

秘密事のように人差し指を口に当てた神威さんに、仕方ない、という表情を返した。

唇に残る感触は悪くなかった。嫌だと思わない。これが宇野さんだったらどう思うのだろうか、と唇に手を当てて少し考えた。

暫くして神威さんの視線に気付き、唇から手を離れた。

「神威さん？」

「何考えてたの」

「宇野さんのことです」

「うーわーそういうことする？ 僕とのキスの後で他の人のこと考えるなんて…そんなに僕って眼中にないわけ」

恨みがましい視線を送った神威さんは、不機嫌を隠すことなく歩き出した。

何故怒っているのか。前にもこんなことがなかっただろうか。…あの夕食のときだ。前はなんとも思わなかったと言ったのに、今回は他人のことを思っていたといったら、不愉快だろう。

勘違いさせたことに気付き、先を歩く神威さんに声を掛けた。

「神威さん、違いますよ。僕はあなたに関しては…」

続く言葉を飲み込んだ。人通りが多い中、何人かが彼の容姿に目を奪われている。眼鏡を取っているため、はっきりとその美貌が現れていた。その群衆の中で、自分が不用意な発言をして彼に不利益があつてはならない。

振り向いた神威さんに、優しく微笑んだ。

「僕に関しては、何？」

続く言葉が気になったのか、神威さんは近くまで戻ってきた。

彼がしたように、人差し指を口に当て、何かを企んでいるかのよう
うに笑った。

「秘密です」

「…うつわー気になる。夏目さんって何気に酷いよね。教えてほし
…」

「蒼井？」

神威さんの声を遮って、声が重なった。その声に人物が思い立つ
たのか、彼は呼びかけに応じようとはしなかった。

不思議に思っ、て声のした方へ向くと、彼と同じ高校の制服を着た
少年がこちらに向かって歩いてくるところだった。髪が茶色に染め
られていて、顔はカッコイイ部類に入る。似たような顔を、どこか
で見たような気がした。

「やっぱり蒼井だ。どうだった？ うまくいったか？」

「うまくいったに決まってるだろ。啓、こっち来るな」

「さすが蒼井だな。で、この人誰？」

神威さんに親しげに話しかけているのを見ると、啓と呼ばれ
た少年は眉を寄せて顔を向けた。いきなりのもので、どう返してい
いのか迷った。

神威さんは矛先が僕に向いたことに、すぐに反応した。

「失礼なことするなよ。この人は、今日お前の兄が世話になった人
だよ」

神威さんの口調は棘を含んでいるものだった。

一度もこんな風に話されたことはない。看病してもらったときに
言っていた、「いつもはもっと口調がキツイ」と言っていたのはこ
れのことだったのか。

少年はその棘を何とも思わないのか、訝しげにこちらを見た。

「…真弓さん？」

少年の呟きに、頷いた。今日お世話になった、ということは、少
年はあの破産の申立人の弟ということか。似たような顔だと思った

のは、弟だからということに納得がいった。
頷いた僕を見て、少年は驚きを隠さなかった。何に驚いているのか。

「へー真弓さんって男だったのか」

「神威さんから何か聞いていたのですか？」

「神威！？ …へえ、そういうこと」

納得したように、少年はニヤニヤと笑って僕の顔を覗きこんだ。
含みのある視線に、一歩足を引いた。

嫌な目だ。意味のわからない興味を持たれるのは昔から苦手だった。

どうしようかと困って神威さんを見ると、彼は勢い良く少年の腰を蹴った。

「…っ蒼、井！」

「真弓さんを困らせるな。こっちに来るなって言っただろ」

「本当に真弓さんのことが好きなんだな」

少年の言葉に神威さんは舌打ちしたが、否定はしなかった。

聞き流してもいいのだろうか。好きの種類がわからない。好意を持たれているということは嬉しかったけど。

神威さんは少年から目を逸らし、僕の方へ向いた。少年に向けていたものとは全く違う、優しい瞳だった。

「僕の顔、綺麗だと思う？」

「はい。容姿端麗、眉目秀麗などの言葉が合うと思います」

「うん。綺麗っていうのは人それぞれ違う感性があるけど、僕は多くの人に『綺麗』だと認識されるんだよ。加えて、僕の父は外科医で、母は薬剤師。まあ、お金持ちの部類に入るよね。昔から、お金とこの顔に惹かれてきた人ばかりを見てきたから、人を好きになることなんてなかったんだ。唯一、傍に居るのは幼馴染みくらいかな。幼稚園からは美香と凜一、小学校からはコイツ、啓がいて。でも、必要なかった。向こうが好意を持ってくれている、始まりは全て理想からだから。美香は余計にね。でも、夏目さんは違っていた」

少年に対しての口調とは違う、いつもの話し方で神威さんは話した。

本当の彼はどちらなのか。

続く言葉があることはわかっていたので、黙っていた。

「夏目さん、あなたは僕に理想を持たなかったよね。ただ『綺麗』だと認めただけで、それ以上はなかった。それが始まりだよ」

神威さんはそれだけ言うと、少年の腕を引っ張って駅へ続く人込みに紛れていった。本当は食事でもするつもりだったが、彼にとつて少年の登場は喜ばなかったのだろう。いつもとは違う神威さんが見られて、それだけでも満足できた。

神威さんの好きの意味。それは人間的な評価だと、今は決め込んだ。

7 本当のことを

「すみません」

少女の呼びかけに、宇野さんが向かった。カウンター越しに立つ少女に笑みを返しているだろうことは見なくてもわかる。

「どういった御用でしょうか」

「真弓さん、ですか？」

真弓、という名前に反応した。

苗字を名前と勘違いして、女性だと思い込んでいる人を何人か見てきた。宇野さんは自分が間違われているのに気付いたようで、少女に確かめた。

「真弓に御用ですか？」

「はい」

少女の答えに宇野さんは自分の席へと向かい、隣に座る僕に声をかけた。

「真弓くん、お客様」

宇野さんが指した先にいた少女に覚えはなく、迷ったが席を立った。

美香の前に立ち、穏やかな表情を浮かべた。

「何か御用でしょうか」

「真弓…さん」

「はい」

少女は厳しい顔をした。その理由がわからず、少女の言葉を待った。不自然な間が空く。

少女は固い声を発した。

「少し時間もられますか？」

神威さんのような完璧さはなく、少女は無理矢理使った、違和感の残る敬語で話した。

何となく悪いことが起こるのを予想したが、しかし断る理由もな

く、頷いて少女と共に部屋を出た。その際、ちらりと宇野さんに視線を投げ、それに気付いた宇野さんは席を立ててこっそりと僕の後を追ってきた。

職員以外の誰かと二人きりで話すことになったときには、なるべく宇野さんに見えないところで控えてもらっていた。それが私用のことであっても、僕の要請があれば、宇野さんは余程のことがない限りそうするようにしている。何かがあつてからでは遅い。

部屋を出てすぐのところにある、階段の横に設けられた休憩スペースに少女を誘導した。ここならある程度人通りがあり、安心して話せるだろう。

少女にソファ―に座るよう促したが、少女はそれを拒否した。

「蒼井と、よく会っているの？」

少女の相変わらずの固い声で言った。それを気にすることなく、質問に答えた。

「神威さん、ですか？」

「名前！？ 気安く呼ばないで！ あなたが口にしていい名前じゃない！」

『神威』という単語に異常なほど反応した少女は、凄じ剣幕で捲くし立てた。それに驚きながらも、神威さんのことであることは確認でき、言葉を続けた。

「わかりました。蒼井さんとは、何度か会ったことがあるだけです」

「約束とかじゃないのね」

「はい。蒼井さんが裁判所に来られたとき、帰りに会うことがあったんです」

神威さんが来たのは4回で、その内3回仕事帰りに会ったとは言わなかった。言う必要もないが、言わない理由もない。自分が言った、真実だが一部を隠した言葉を不思議に思った。何故そんな言い方をしたのか。

少女は満足したように、表情を少しだけ緩めた。

「そうよね。神威があなたに会うためにくるはずがない」

神威、と言った少女に、丁寧に戻した。気安く呼ぶなど言っていて、自分はそれを使う。優越感を味わっていることがわかった。しかし、何が少女をそうさせているのかがよくわからなかった。少女が一体、神威さんについて何をしに来たのか。

少女は肩に掛かる髪を指に巻きつけ、勝ち誇ったかのように笑った。

「言っておくけど、私は神威の彼女なの。神威が何を言ったか知らないけど、本気にしないことね。裁判所の人だから、面白がっているだけ。好意を表したとしても、それは遊びよ。あなたは男。神威は女の私の彼氏なの」

少女は嘲るように笑った。

その少女に対し、少し憐憫に思った。言うことで、それを現実のものだと示したいということが見て取れる。必死さが窺えた。少女の言っていることが真実なのかどうか、今はわからない。

ただ、自分は男、という当たり前のことを今更ながら実感した。

「それだけが言いたかったの。じゃあ、これで失礼します」

少女はそのまま階段を下りていった。その後姿を見送りながら、呆然と立っていた。少女の姿が見えなくなつて、やっと全てのことが理解できた。その途端に膝の力が抜け、体を支えられなくなり、ソファーに倒れ込むようにして座った。

「神威さん……」

前屈みになつてぼつりと呟いた。

後ろから現れた宇野さんが声を掛けてきた。

「真弓くん？」

宇野さんの声に顔を上げた。僕の顔を見て、宇野さんは目を見開いた。そして、そつとポケットに入っていたハンカチを差し出した。そのハンカチの意味が分からず、宇野さんの顔を窺った。

「宇野さん？」

「真弓くん、泣いてるわよ」

宇野さんの指摘に、そこで自分が泣いていることに気付いた。

頬を伝う液体が、確かに自分が涙していることを気付かせる。宇野さんからハンカチを受け取り、目に当てた。水分が吸い取られる度に、また新しく出てくる。

最後に泣いたのがいつかわからないほど忘れていた涙は、悲しいと感じていることを表していた。

「深入り…してしまってたんですね」

「あの子の言ったことが全てだとは思わない。でも、本人に確かめるかどうかはあなた次第よ。その結果が、良いかどうかはわからないから」

宇野さんはそつと肩に手を置いた。

今だけは何かに縋りたかった。肩に置かれた宇野さんの手に触れ、俯いて泣いた。宇野さんは何も言わなかった。

少し落ち着き、しかし涙は流れたままで、宇野さんの顔を見た。

宇野さんは視線を合わせ、言葉を待った。

「僕は神威さんを好きなのでしょうか…」

「そう。それは認めなさい。今まで信じられなかった感情だとしても。私は真弓くんがそういう感情を持てたという事実が嬉しいわ」

宇野さんは優しく僕の涙を掬った。くすぐったいその感触に、微笑した。しかしすぐにそれは消され、思い詰めるように沈鬱とした表情になった。

そして、独り言のように、微かな声で漏らした。

「蒼井さんが僕を気になったきつかけが『性善説』を選んだということ、というのは確かなんです。そして全ての質問に答えたこと。加えて裁判所の人間。もし、答えることの出来ない質問があったら、どうなるのでしょうか…」

確かなことは何もなかった。全てが遊びと言えばそれまでで、彼の本心は誰にも知り得なかった。

駅に向かう足が重かった。神威さんに確かめればすぐにわかるこ

となのに、答えを知るのが怖かった。

もし、少女が言ったことが全て本当のことだったら。裏切られたときが怖いから、感情を封印してきたのに。

「夏目さん」

今一番聞きたくて、同時に聞きたくない声がした。神威さんの姿を認めると足を止めた。彼はそれを見て僕の元へと歩いてきた。

彼が近付くにつれ、足が後ろへ下がる。そして、不意に彼がいるのとは逆の方へと走り出した。

「夏目さん！」

神威さんは叫んだ。その声を振り切るかのように走り、彼はその後を追ってきた。

彼の方が足が速く、距離は段々と縮まってくる。

数分後、人気のない公園で腕を捕らえられた。

「なんで…逃げるんだよ…」

「…」

無言のまま顔を合わせようとしない僕に、神威さんは腕を掴む手に力を込めた。

そして僕のの前へと回り、顔を覗き込んだ。

「夏目さん？」

「蒼井さん…」

辛そうに笑った。その表情に、神威さんはそつと顔を寄せた。

それに過剰に反応し、また一步後ろへと下がった。

「何があつたの？」

「何も…」

「嘘だね」

一蹴した神威さんは、僕の目元に唇を落とした。訳が分からず、拒まなかった。

呆然とする僕に、彼はそのまま、もう片方の目元にも唇を付けた。「目、赤いよ。言いたくないならいいけど、僕に関係があることなら駄目。何があつたの？」

「蒼井さん…」

「だから、それ何？ 何で今更『蒼井』なワケ？」

『神威』とは呼ばず『蒼井』と呼んだ。明らかに昨日とは違っている。

ふっと諦めの表情を浮かべ、腕を掴む彼の手に触れた。

「あなたの『彼女』に言われたんです。今日来られて」

「彼女？ いないけど。誰それ」

神威さんは全く覚えがない、と首を捻った。そして何か思いついたかのように目を見開き、その後嫌そうな顔をした。

その表情の変化に首を傾げ、彼の言葉を待った。今日会った彼を同じ高校の制服を着た少女は、確かに『神威の彼女』だと言った。しかし、それを否定する彼。

神威さんは深く溜息を吐き、僕を上目遣いに見た。

「それ、美香だよ。昨日幼馴染みって言った奴。明るい茶色のストレートの髪に北高の制服着てなかった？ 顔は可愛い部類に入ると思うけど」

「…そうです」

少女は確かに可愛いと素直に言える容姿だった。加えて明るい茶色のストレートの髪に北高の制服。

それを認め、彼の言った人物に当てはまることを告げた。勝ち誇ったように笑う顔が甦る。

「夏目さん、何で目元が赤いの？ 何に泣いたの？」

「それは…」

話題が自分に移り、目を逸らした。頬が紅潮する。それを自覚しながら、腕を振り払おうとした。それを彼は強い力を込めることで拒んだ。

何も言えなかった。泣いた理由はわからない。思い当たることはあるが、それでも自然に出た涙は明確には理由を示していなかった。神威さんの彼女の存在に、自分は何を思ったのか。何に泣いたのか。神威さんはそっと顔を寄せ、2度目のキスをした。

「夏目さん…」

キスの合間に発せられた言葉は甘く、酔いそうになった。決して嫌ではない行為。しかし、美香の『男』という言葉が甦った。彼の体を力いっぱい押し返した。

神威さんは不満を顔に表した。

「夏目さん？」

「美香さんが…蒼井さんは面白がってやっているだけだと言いました。僕は男だから、遊びだと」

「そんなこと！」

「蒼井さんは、僕のどこが良いのですか？」

問いに、神威さんは口を開こうとしたが、何も言わずにきつく口元を引き締めた。

気まずい沈黙に、ふっと優しい笑みを浮かべた。本当に優しく、慈愛に満ちた笑顔。この場には合わなかった。

神威さんは、それでも何も言わなかった。

「言えませんか。…蒼井さん、さようなら」

嘆息し、拒絶するかのように別れの挨拶をした。

そして、そのまま駅へと向かった。彼は追ってはこなかった。

チャイムは鳴らずに、玄関の鍵が開く音がした。リビングから玄関に向かった。

この部屋の合い鍵を持っているのはただ一人。

「あ、思ってたより調子良いみたいだね」

ドアを開けたのは高校からの友人、須賀由宇だった。

由宇は友人というよりは家族に近い存在だった。両親が死んだとき、一番近くにいて、すがりつきたいと思った。その手を取って受け入れてくれた由宇は、今では唯一絶対の味方だった。本当の親代わりの存在だった。

その由宇が来た理由を思い出した。

そして、今まで忘れていたことに驚いた。

「明日は命日ですか…」

「忘れてた？ 忘れるほどの何かがあったのかな？」

由宇は僕の肩を軽く叩き、リビングへ向かった。

その後を追った。まだ動揺していた。あれだけストレスになっていた両親の命日。それが今年是由宇が来るまで気付かなかった。その原因に心当たりはあった。

「休んでも良かったんですか？」

「2日くらい、大丈夫だよ。それより夏目、近況報告してもらおうか」

珍しくにつこりと笑った由宇に苦笑して、ローテーブルを挟んでソファーに座った。

別に隠すことではない。由宇が水筒から注いだ茶を受け取って、一息ついた。

「職場で、高校生に会ったんです。今まで見たことないくらい、すごく綺麗な顔をしている子です」

「女の子？」

「いえ、男の子です。その人と何度か会うことがあって。智哉さんや小百合さんというみたいに楽しかったです」

智哉さんたちというくらい楽しい。その表現に由宇は笑みを深めた。

僕は今、自分の世界を広げている。両親から最悪な形で分かれた僕の世界は閉じていて。その中に入る事ができたのは、入ることを許されたのは由宇だけだった。

高校からの友人である智哉さんと小百合さんは特別な位置にいますが、それはまだ外側になる。

「その子は夏目をどう思ってるのかな？」

「嫌われてはいないと思いますけど。何度かキスされましたし」

「キス！？ あーでも夏目はなんとも思わなかったんだね？」

「はい。嫌がらせではなかったようですが」

由宇はため息を吐いた。由宇のため息の理由が判らず、首を傾げて烏龍茶を一口飲んだ。

「その子の周りの環境はわからないけど、キスするくらいなら夏目は好かれてるよ。多分、普通以上には」

「まだ知り合って3ヶ月ですよ？ それに男子高校生ですし……」

「問題なのは男？ 高校生？ 年の差？ 智哉は僕を高校生のときから好きだったんだよ」

智哉さん。由宇の恋人。高校のときに二人は出逢い、大学で恋人になった。由宇は同時に小百合さんに告白されたが、最後に智哉さんを選んだ。

それは僕から見れば必然のように自然な結果だった。今の二人を見ていれば、それ以外には有り得ないように思える。

「……そうですね。それは言い訳になりませんね。ただ、怖いだけなんです。もう、期待して裏切られるのは嫌なんです」

良い子でいれば、きっと両親は褒めてくれる。そんな期待は、いつも裏切られた。両親は、一度も振り返らなかった。できて当然、できなければ努力が足りない。自分に嘘を吐かなければ、耐えられなかった。

「僕はいから。夏目が裏切られても、僕はずっといるから。だから、好意を疑わないことから始めよう？」

「……はい。親離れできるように、ですね」

由宇はそうだね、と苦笑いした。

神威さんといることでは何かが変わると、確信していた。智哉さんや小百合さんのような友情ではなく、由宇のような親愛でもない。

正体不明の感情に、由宇は正解を告げなかった。

それは自分で気付かないと意味がない。

8 知りたかった

「なんとかしてくれよ」

「どうすることも出来ません。落ち着いてください」

終業時刻は大幅に過ぎていた。普段なら帰っている時間だ。鞆は足下にある。

終業時刻の数分前から、目の前に立つ青年によって足止めされていた。

神威さんと一緒に破産を申立にきた青年だ。

数時間前に、青年の友人は勾留質問のために裁判所に来ていた。それを知って裁判所に来た青年は、ずっと同じことを繰り返している。

友人を助けてくれ。

今更、僕にできることはなかった。できることがあったとしても、私欲で、なんてできない。

宇野さんが遅れて到着したと同時に、後ろから声がかかった。

「兄貴！」

少年、啓さんの声に青年と同時に振り向き、神威さんと啓さんの姿を視界に入れた。

驚いたが、すぐに表情を変えた。いつもの作ったような笑みを浮かべた。それは僕を知らない人には優しい笑みに見えるはずだ。

それが神威さんにも効いているかはわからないが。

神威さんはそれに片方の眉を上げたが、啓さんはそのまま二人の方へと歩み寄った。

「何してんだよ！」

青年と僕の間立った啓さんに、青年はバツが悪そうに目を逸らした。神威さんはそっと僕の横に立ち、様子を見ていた。

神威が隣に立ったことに少し距離を置こうとしたが、それを気にするより青年の動向に注意を向けるのが重要だった。

青年は神威さんの姿を認めると、縋るように彼の腕を取った。

「なあ蒼井。お前から頼んでくれよ。その為に裁判所の人と繋がりを持ったんだろ？」

青年の言葉に、神威さんは僕の方へと向いた。

神威さんを見て、苦笑いを浮かべた。彼の表情は固くなった。青年が掴む手を振り払い、啓さんに向かって刺すような視線を向けた。

「何を言っただんだ」

「俺は別に…ただ、蒼井が裁判所の人と親しくしてることだけを」

それだけではないのだろう。他にも利用しようとしている、というようなことが含まれているように言っただけに違いない。

神威さんは啓さんの胸倉を掴み、きつく睨んでから勢いよく腕を振った。啓さんは軽く飛ばされ、青年にぶつかった。青年はなんとか啓さんを受け止め、様子の変わった神威さんを無言で見ていた。

神威さんは僕の方へと向き直った。

「夏目さん…」

「勾留まできたら、僕にはどうにも出来ません。仲良くなるなら、検察や警察の方にすれば良かったですね」

につこりと、本当に優しく笑い、少しすまなそうな表情に変えた。諦めを過ぎて、何の感情も表せなかった。

対処法を探している神威さんに、最後だというように、告げた。

「僕は4月から関東に行くことになってるんです。もう、会うこともありませんね」

この場に合わない穏やかな笑顔と、発せられた言葉。

神威さんは突然僕の腕を掴んだ。突然のことに反応出来なかった。神威さんは僕の腕を強く掴み、下を向いた。

「夏目さん、もう仕事は終わった？」

「…はい」

「一緒に帰るよ」

僕の鞆を取り、神威さんは掴んだ腕はそのままに歩き出した。

「宇野さん、後はお願いします」

宇野さんが頷くのを確かめ、お辞儀して引き摺られるような格好で彼の後について行った。

何も言わず、神威さんに引かれるがままに歩いた。彼の足は止まることなく、人の波を器用に避けながら進む。彼が何処に向かっているのかがわからなかった。

神威さんは駅前の公園へと足を向けた。

「蒼井さん？」

「それ、やめてよね。少しここで話そう」

神威さんは手を離し、すたすたと公園の中へと入って行った。しっかりとした足取りは僕がついて来ることを確信しているもので、その彼の所作にふつと表情を緩めた。

神威さんらしい、と思えるその自信の表れ。

彼はベンチの前に立った。

「ここに座ってくれる？」

ここ、と指した場所に、素直に従って座った。それを確認した神威さんは、眼鏡を外してから少し離れた場所にある自動販売機に向かっていった。

その場を動かず、彼が戻ってくるまで大人しく座っていた。

暫くすると神威さんは手に2つの缶を持って戻ってきた。缶の装丁から、緑茶だとわかる。どちらも開けられていたが、それを気にせず、彼が差し出した缶を受け取った。

神威さんは僕の前に立ち、眼鏡を外して対峙した。

「関東に行くって本当？」

「はい」

神威さんは片方の腕を組み、緑茶を一口飲んだ。それに倣うように、緑茶に口を付けた。緑茶の苦味が口の中に広がる。

神威さんは僕の返答に、花が咲いたように笑った。眼鏡を外して

いるので、美麗な容姿が際立つ。いつもと違う、綺麗すぎる笑顔。それに違和感を覚えたとき、すでに何かが変化していた。

「もう会わないつもりなんだ？」

「それが良いと思うからです」

はつきりと表情を変えずに告げた。それに神威さんは一層笑みを深くした。

その意味がわからず、首を傾げた。彼はそれに軽く首を横に振って否定し、缶に残った緑茶を飲み干した。そして器用に離れた缶専用のゴミ箱に投げ入れた。

「僕のことそんなに嫌い？」

神威さんはにこにこ笑いながら言った。返す言葉が見つからず、誤魔化すように緑茶を口に含んだ。見つからないのは言葉ではなく、これからどうするべきかだった。

何が本当で、何が嘘なのか。何一つとして確実ではなかった。

「嫌いじゃありません」

「じゃあ何で？ 僕は夏目さんが好きだよ」

初めて告げられた言葉。前は啓さんが言った『好き』を否定しなかっただけで、確かなものはなかったのに。はつきりと言われ、動揺した。

由宇は何て言っていただろう。普通以上に好かれているはずだ、好意を疑わないことから始めよう。

じゃあ、この感情の種類は何なのか。

「…でも、美香さんが」

「美香は関係ないよ。なんなら、縁を切ろうか？ 夏目さんが心配なら」

「そんな…。やめてください。そんなこと…」

言葉を続けられなかった。口が上手く動かなかった。思考は霞み、眠気が目の前まで襲ってきていた。

不自然な眠気。それは体が望んでいる眠りではなかった。

下りてくる瞼。最後に視界に入れたのは彼の綺麗な笑みだった。

はつきりしない意識の中、視覚が捉えたのは確かに知っているものだった。

天井は前に見たことがあり、掛けられたシーツの感触も知っていた。

起き上がろうとしたが、出来なかった。手が固定されていて、動かない。視線を上げると、両手はベッドに縛り付けられていた。

状況を理解しようとしたとき、ドアが開いて神威さんが現れた。

「蒼井さん……？」

「おはよう、夏目さん。気分はどう？」

爽やかに挨拶をした神威さんは、ベッドの端に座った。軽く沈んだベッドに、意識がはつきりしてくるのを感じた。

僕の様子を見て、彼は人差し指と中指で挟んだ小さなビニール袋に入ったものを目の前に翳した。

「トリアゾラム。ベンゾジアゼピン系の薬だよ」

「睡眠薬……」

正解、と口の端を上げた神威さんは、ビニール袋を机の上に置いた。トリアゾラムを知らなかったが、自分の身に起こったこと考えれば自然と答えは出た。まだ頭に霞が掛かっているようだったが、それでも彼から視線を外さなかった。

彼も、僕を凝視していた。

「そんなもの、何処で」

「言わなかった？ 僕の母は薬剤師だって。こんな薬、すぐに手に入るよ」

いくら母親でも簡単に渡してもらえはしないだろう。何をしたのか。彼なら、自分を犠牲にして手に入れるかもしれない。

「何故こんなことを？」

「何故？ それを今更言う？ 僕はあなたが好きだって言ったよね。それをあなたは拒絶した。そして離れていくことが決定している。」

それなら、どういう終わり方をしてもいいよね？」

神威さんは僕の服のボタンに手を掛けた。スーツの上着はハンガーに掛けられており、シャツ一枚になっていた。

彼の手から逃れるように、身を振った。しかし手が固定されていることより、大した抵抗は出来なかった。動く度に、手首が紐に擦れて痛みを感じる。

彼は最後のボタンを外し、顕わになった僕の上半身を眺めて柔らかい笑顔を浮かべた。

「蒼井さん……？」

「もう、戻れないんだよ。そこまで、来てしまったんだ」

そつと壊れ物に触れるように、神威さんは僕の胸に手を置いた。

彼の少し冷たい手に、体が震えた。

嫌でも、今置かれている状況がわかる。これから何が起こるかさえも。

神威さんは僕の腰を挟むように足を着き、覆い被さった。

「あなたさえいれば、それで良かったのに」

唇が触れる瞬間、呟かれた言葉に目を見開いた。

彼は僕がそんな反応を返したことは知らず、深く口を合わせた。

何度も角度を変えて合わさる唇に、二人の呼吸は荒くなっていった。無意識の内に、軽く口を開けていた。その隙を逃さず、彼は僕の口内へと舌を侵入させた。そのまま深く、何度も口内を弄る。彼が口内を犯していくのを、意識の片隅で感じていた。

この状況は、彼の本当の気持ちを示しているのではないか、という疑問が思考を占める。そう思った瞬間、体の感覚が戻ってきた。

熱くなっていく体を実感した。

「神威……さ、ん」

唇が離れた合間に発せられた熱を含んだ呼びかけに、彼はふつと表情を柔らかくした。

気を張り詰めていたのはどちらも同じだった。神威さんの笑顔にそれ以上何も言えず、ただ彼の動向を見守った。

彼は僕の首に、噛み付くように口付けた。鋭い痛みが走り、何が起ったのかわからなかった。こんな感覚は知らなかった。体が熱くなっていく理由がわからない。今まで、感じたことがない。

おかしくなっていく自分が嫌で、どうにかして逃れようとした。

しかし、拒絶するように開いた足の間に彼は体を滑り込ませ、僕の抵抗を封じた。一層不利な状況になっていた。

どうにもならないとわかっていても、体を動かそうとした。手首が擦れ、痛みが強くなっていく。彼は僕を悲しそうな表情で見ている。た。

泣きそうに見える表情。動きを止めた。

「我が儘だつてわかつてる。でも、もう終わることが決まっているなら、僕はあなたを知りたい」

これから何をされるのか、知識として知っていた。由宇のことを理解したくて、調べたことがあった。しかし、それはただの興味だけで、強い性欲はなく、対象もいなかったために体は性を求めているなかった。

知識としては知っている程度で、感情が欠如している僕には必要のないものだった。

「もしかして、初めて？」

「そう…です。必要、なかった…もの、ですから」

荒い呼吸の中で発せられた言葉は聞き取りにくかったはずだ。しかし彼には伝わっていたようだった。

彼は優しく何度目かわからないキスをした。彼から与えられる全てに、囚われていっている気がした。五感が、彼を認識する。

彼は、ふっと優しい表情を浮かべた。

そして子供にするように、僕の髪を梳いた。

「神威、さんは…経験があるの…ですよね」

「ないよ。自分で処理してたから」

さらりと言った神威さんは、手を下着の中へと侵入させた。

体は敏感に反応し、体が強張った。嫌だと思う一方、心の何処か

でそれを望んでいた。理性は確かにあったが、今まで感じたことのない質量の性欲が侵蝕していく。

否定するように首を振った。

「興味で女性の相手をしたら、後で問題が起こるのはわかっているから。完璧に防ぐ方法はないんだ。子供が出来たら、僕は逃げられない。まあ、人自体嫌いだったからそれで良かったんだけど」

人が嫌いだったという彼は、今は僕に執着していた。

時折、彼の顔に浮かぶ泣きそうな表情が引つ掛かっていた。この結果を望んでいないことだけはわかる。

「僕は…代わり、なのです…か？」

「何の？ 代わりなんていない。僕が好きなのは、好きになったのは夏目さんだけだから…」

彼は僕の体の至るところにキスを降らせた。彼が触れる度に、体は震えた。

この状態を嫌悪してはいなかった。一方的にされるがままの状況にも係わらず、心は彼を拒絶せず、受け入れていた。それが意味する答えを自然と知り、思いが明確になってきた。

答えはわかっていた。感情はないと思っていた。しかし、捉えられた視線は逸らしようがなかった。探していたのは、ただ一つ。

それに気付いてしまったのだから、彼を拒む理由は見つからなかった。

「神威…さん…」

「あなただけが欲しい。もう会えないのなら、体だけを求める。後で訴えるなら、それでいいから。後で、罰は受けるから」

やっと、彼が泣きそうな表情を浮かべる理由がわかった。彼は自分が選んだこの状態が悪いことは理解している。そして、それに対して罪悪感を持っている。しかし、それを覆すほどのものがあるからこそ、彼はこの状況に持ち込んだ。

その原因が自分にあることを知り、どうしようもない優越感を味わった。いつの間にか衣服は全て脱がされ、何も身に着けていなか

った。それに羞恥を覚えながらも、全身で彼を感じていた。

「ん…かむ…い…さん」

神威さんは、純粹に笑った。本当に嬉しいことがわかる子供のよ
うな笑みに、一層体が熱くなるのがわかった。

彼から与えられる全てが、夢のように感じられる。しかしそれは
現実で、望んでいない結果だった。縛られた手が、鈍く痛みを発す
る。それ以上に体は快楽を感じていて、混乱した。

神威さんへの想いと、快楽。そして、現実だと知らせる手首に残
る痛み。

「夏目さん、ごめん」

「神威さん…」

「僕を憎んでいいから」

悲痛な声に、心が揺れた。彼にこんな顔と声にさせているのは僕
だ。

何が本当かわからない。ただ、一つだけはわかっていた。
全てのことが許されるほど、確かに彼が好きだった。

「夏目さん…」

意識を失っていたのは少しの間だということが、体に残る熱でわ
かった。神威さんは丁寧にタオルで僕の体を拭いていた。そして目
を開けた僕に、顔を歪めながら名前を呼んだ。

まだ手は縛られたままであることに気付き、体を擦った。

「解いてもらえますか？」

神威さんは頷き、タオルを机の上に置いて手首の紐を解いた。
紐の下に残った痕が痛々しく、彼は目を逸らした。

自由になった手をぶらぶらと振り、そして起き上がった。神威さ
んは決心したかのように僕の方へ向き、目を閉じた。殴られるのを
待っているようだった。

神威さんの頬へ手を伸ばし、軽く抓った。

「神威さん、本当にわからなかったのですか？」

神威さんは目を開け、僕を見た。

表情は柔らかくし、怒っているような雰囲気は出していない。

「自分でも気付かなかったのですが…神威さんなら気付けたはずですよ」

「…何に？」

僕が言わんとしていることが、彼にはわかっていないようだった。罵倒される、修復不可能なほどに嫌われる。そんなことを予想していたのだろうか。

非難をせずに、真っ直ぐに彼を見つめた。

「足りないんですよ。これだけじゃ、足りない」

神威さんの首に腕を回し、そっと触れるだけのキスをした。

それに彼は僕が言いたいことを理解したようで、それと共に驚きの表情を浮かべた。

「夏目さん…」

「神威さん、好きです。もっと、あなたをください」

誘うように妖艶な笑みを浮かべ、彼の手を掴んだ。そのまま自分の方へと引き、後ろへと倒れ込んだ。まだ温もりを残すシーツは先ほどまでの行為を如実に語っており、少しの羞恥を感じたが、それでも彼の手を離さなかった。

神威さんはすぐに嬉しそうに笑みを浮かべ、誘いに乗るように口付けた。浅い口付けでは満足せず、深く、角度を変えて何度も合わさった。

飽きないキスを繰り返し、彼は少しだけ唇を離し、吐息が掛かる距離で囁いた。

「夏目さん、もうあなたでしか満たせない」

「…僕ですよ。あなたの全てを感じたい」

彼の服に手をかけ、一つずつボタンを外していった。上手く外れないボタンに、彼は僕の手をそっと退けて自分で外していった。

頭わになる上半身は、顔に合っているものだった。均整のとれた

体をじっと見つめ、触れた。人形であるように思ったが、この体は僕と繋がった。その事実には満足した。

彼は覆い被さり、また僕の体を貪っていった。

9 だからもう迷わない

「関東に行くのは1年だけです」

熱に濡れた時間が終わり、体をタオルで拭った後、体をくっ付けたままベッドに横たわっていた。

離れたくなかった。

僕の言葉に、神威さんは時が止まったように固まった。

「……どうということ？」

「研修に行くんです。研修所が関東にありまして、そこで1年勉強して書記官になるんです。宇野さんみたいに」

くすくす笑うと、神威さんは脱力した。そして強く僕を抱きしめた。その強い抱擁に、身を振った。彼が少し弱めた拘束に、腕を引き抜いて抱き返した。

また熱が溜まっていくのを感じたが、それでも気付かない振りをした。明日は平日であり、どちらも学校と仕事という決められた用事がある。この関係でそれに支障をきたすことは出来ない。

「待ってるから。……待っていてもいい？」

くぐもった声で言った神威さんに、苦笑した。

いつもの強気な彼はいなかった。1年という短くはないが、決して長くはない時間の保障が欲しいように見える。

それは僕も同じだった。彼が人に興味はなくても、彼の容姿に惹かれる者は多い。

「待っていてくださるのなら」

そっと彼の耳元で呟き、勢いよく起き上がった。

脱ぎ散らかした衣服を拾い、身に着けていった。それを見ながら、神威さんは自分も学生服に着替えるために起き上がった。

もうすでに空は暗く、街にはネオンの光が溢れていた。2ヶ月後

にはここを離れるため、仕事の処理に追われていた。それでも6時
を過ぎたところで帰ることが出来る。まだ明るい裁判所の3階を背
に、駅へと歩き出した。

「真弓さん」

聞き覚えのある声に、足を止めた。

大通りから少し外れた、裁判所を繋ぐ道に少女はいた。前と同じ
ように制服を着ていたが、違っていたのは表情だった。前の気を張
り詰めたものではなく、何かを吹っ切ったようなすすきりしたもの
だった。

美香さんは晴れやかに笑い、僕の前に立った。

「今晚は。そして、ごめんなさい。意味もなくあなたを傷つけたわ」
「気にしないでください。自分の気持ちに気付いていなかった僕も
悪いんですから」

謝るときだけは、素直にすまなそうにしおらしく頭を下げた美香
さんに、穏やかに笑った。

そして自分の非を詫びた。確かに一方的に彼女が悪かったが、少
しだけ僕にも非がある。

美香さんはそんな僕を驚いたように見て、その後に意地悪く笑っ
た。

「蒼井にすごく怒られたんだから。縁を切ろうと思ったって。…う
ん、そっか」

「美香さん？」

「なんで私があなたに負けるのか、わからなかったけど。でも、何
となくわかった。蒼井はあなたじゃなきゃ、駄目だったただけなのね。
…真弓さん、一つ頼んでいい？」

「何でしょうか」

「卒業式の日、蒼井を迎えにきてやって。きっと、また中学の時と
同じように大変なことになると思うから」

美香さんの頼みに、返事をする事が出来なかった。

親でもない僕が卒業式に行くと、変に勘繰られるだろう。

神威さんは、僕とのことを周りに知られてもいいと思っているということはわかっていた。しかし、自分の意思とは関係なく視線を集める彼に、それでは駄目だと思ってしまう。互いの思いだけでは、どちらも傷付くことになる。

無言で返すと、美香さんは苦笑して言った。

「蒼井のために思うなら、どんな形でもいいから来てあげて。男だから嫌なら、女に見えるようにするとか。そこまでしたくはない？」
「…女装、ですか。それでいいなら」

彼女の提案を、承諾した。

卒業式を見に行きたかった。神威さんに会えなくても、見れるだけで良かった。もう高校生ではなくなる神威さん。大学に進学することは決まっていたが、それでも何かが変わる気がしていた。

幸いというか、女装は大学のときに経験している。

「有難う御座います」

「お礼をいうのはこつちよ。ありがとう、真弓さん。くやしいけど、仕方ないもの。楽しみしてるから、卒業式」

美香さんは、少し顔を顰めて笑った。

そして右手を差し出した。それを受け取り、握る手に力を込めた。柔らかな女性特有の手。細く、折れそうに感じる。その手を神威さんは選ばなかった。彼は、自分が良いと言った。

僕の表情が複雑なものになったのを見て、彼女は失笑した。そして握っていた手を振り払い、背を向けて歩き出した。

突然のことに、何も言えなかった。

「蒼井にはあなたしかいない。あれだけ惚気を聞かされたら、嫌でもわかるわ」

聞こえるように言った彼女の声は、漏らさずに届いた。

負の感情が籠っていない声は、心を軽くした。神威さんに近い存在の幼馴染みに嫌われたくはなかった。認められることまでは望んでいなかったが、彼女は認めてくれた。

それが純粹に嬉しかった。

神威さんのために何かをすることは苦痛ではなかった。
たとえそれが『女装』でも。

卒業式を3日後に控えた2月末、神威さんを家に泊まりにくるよう誘い、約束をしていた。授業は午前までで終わるため、彼は午後から裁判所で傍聴していた。それはさながら出逢いと同じような光景で、僕と神威さんは密かに笑った。宇野さんも定位置に座って微笑して見ていた。

僕が帰る用意をしている間、待合室で神威さんは宇野さんといったようだった。帰る用意は終わったが、声を掛け辛かった。自然を隠れるように壁に背を当てた。

神威さんの搾り出すような声が聞こえた。

「僕は夏目さんを、酷いやり方で抱きました。夏目さんの意思に係なく」

彼の告白に驚いた。何故それを宇野さんに言うのか。続きを聞く必要があるそうだった。

宇野さんは冷たい声音で、はっきりと言った。

「それは、真弓くんの望まない形で、ということ？」

「…はい。薬で眠らせて無理矢理…。自分の意思だけの行為でした」
言い切った彼の言葉の後に、乾いた音が響いた。

宇野さんがその場を離れる足音が聞こえた。彼は何も言わずに、その場を動かなかった。

完全に出るタイミングを外した。宇野さんの戻ってくる足音に、壁に張り付いた。

「謝らないわよ。あなたはそれだけのことをした。真弓くんの様子を見ると、彼は許したんでしょうね。だから、私だけはあなたを許せない」

「…有難う御座います」

「それが過程でも、真弓くんはあなたを選んだ。それだけが確固た

るものよ」

一応の決着は着いたようだった。いつものように穏やかな表情をして二人の前に出た。

先ほど起こったことは微塵も感じさせない雰囲気と二人の様子に首を傾げた。

それに宇野さんは苦笑し、神威さんは優しく笑った。

「何があつたんですか？」

「私が彼を叩いたのよ」

「僕はそれで救われました」

僕の疑問に即答した二人に、一層混乱したが、神威さんの傍に寄って彼がハンカチで押さえている頬に手を添えた。

彼は隠そうと手に力を込めたが、僕の有無を言わせない仕種に澁々手を離れた。

頬は痛々しいほどに赤くなっている。溜息を吐き、彼からハンカチを受け取った。

「色が白いからこんなに赤くなるんですね。…それでお二人共、気持ちの整理は出来ましたか？」

宇野さんと神威さんは同時に頷いた。それを確かめ、神威さんの手を取って宇野さんに会釈して背を向けた。

「真弓くん、あなたは硝子の殻を纏っていたけど、それを破った感想は？」

宇野さんの不可解な言葉に言いたいことがわかり、口元に笑みを浮かべた。背を向けていることより宇野さんには見えない。

少し間を空けて考え、軽く息を吸って振り返って声を出した。

「破ったのは一部ですけども…それでも良かったと思います。神威さんの手を受け取れますから」

僕の返答に、宇野さんは苦笑した。恋に溺れている発言だが、盲目的にはなっていない。

宇野さんの苦笑を背に、神威さんの手を引いて歩き出した。彼は大人しく従った。

先程までの重苦しい空気は、
跡形もなく消えていた。

10 硝子の殻を破った僕たちは

食後のコーヒ―を淹れ、神威さんに差し出して椅子に座った。

「僕の本当の始まりは、これからなのかも知れませんが。あなたと歩む道から、始まる。一緒に歩いてくれますか？」

神威さんに右手を差し出した。彼は躊躇うことなく手を取り、力を入れた。

一緒にスタートから始める。

「もちろん。他人が何を言おうと、関係ないよね。意味なんていない。無理に付けた理由に、価値はないから」

神威さんは僕の手の甲に唇を付けた。

童話であるような仕種と手の平に感じる温もりを柔らかさに、柔和な笑みを浮かべた。

彼は唇を離し、指を絡めて手を繋ぎ直した。指が絡むことで、触れる部分が増える。互いの体温が交わり、染まる。

その安心する温度に近付きたくて、手に力を込めた。

「人の気持ちは不変なものではないからこそ、『ずっと』と『絶対』という言葉は使えないけど。でも、僕は夏目さんが好きだよ。あんなことをしておいて言うことじゃないけど」

「あれで良かったんですよ、僕の場合は。きつかけだと思ってください。…それ以上を望んだのは僕ですし」

あんなこと、が指す出来事を思い出し、後半を小声で曖昧にした。彼にはしっかりと聞こえてようで、苦笑した。

言葉で伝わらないものは確かにあり、それを伝えるのには他の方法を採るしかない。そして、その方法は最終的には望まれたものだった。彼の自分勝手さで行われた罪を含んだ出来事は、結果的には誰も傷付かなかった。

今まで傷付けられてきたからこそ、気持ちに嘘はなかった。

「そつえば、宇野さんの言っていた『硝子の殻』、僕にも当ては

まるよ」

神威さんは繋いだ手をまだ赤みの残る頬に当てた。

彼の低い体温を感じた。彼の手は僕の熱を吸収し、冷たさは感じられなくなっていたため、頬に触れることによって彼の本来の体温を感じられた。それは、いつも求めていたモノだった。

何も言わず、その続きを待った。

「硝子だから、外は見えているんだ。でも、孤独でしかなくて。その殻は、両親と周りの環境、そして僕自身が造っていた」

彼の言葉に同意した。彼と僕の環境は向いている方向は違っていたが、向けられているモノは同じだった。

根底にあるのは、返すモノが大き過ぎるということだった。受け取る以上を与えなければならぬ。その重圧がいつもあった。それは殻を強固にするのに充分で、知らない間に覆われていた。

「僕の殻はほとんど壊れていた。でも殻の欠片は鋭くて、誰も寄せ付けなかったんだよ。夏目さん以外はね。夏目さんだけが、踏み込んできて手を取ってくれた」

「僕の場合、神威さんは外から叩いてくれたんです。出てきていいと。でも、まだ神威さんが叩いてくれた部分しか破れていないんです。今はまだ、神威さんだけが判ればいいですから」

両親に見出せなかったものを、彼は持っていた。親代わりの由宇は、殻を破るのではなく、守ってくれていた。自分で出てきても良いと思えるまで、外から守ってくれていた。

神威さんだけが、外から手を伸ばし、外の世界に誘ってくれた。

そつと額を合わせ、彼と視線を交差させた。吐息が掛かる距離に、唇は引き寄せられるように自然と重なった。

遊びのような触れるだけのキスは、心を満たした。

卒業式が終わったら。神威さんが高校を卒業したら。そのときから、彼と向き合える。大学に進学することは決まっていたが、それでも高校生と大学生は大きく違う。まだ子供だと認識される高校生ではなくしたら、遠慮することなく大人として接することが出来

る、と彼に告げていた。今までも子供扱いをしていなかったが、心の問題だった。そのため、彼はあの夜以降、僕にキス以外は何もしなかった。

3日後、全ての決着がつく。

卒業式の日、職場の更衣室で身支度を整えていた。宇野さんは時間休暇を、僕は一日休暇を取っている。

少し前に宇野さんの助言の元で購入した女性物のスーツを着込み、肩までの黒いストレートのウィッグを着け、宇野さんの手によって化粧を施されていた。卒業式は10時から正午にかけて行われる。『迎えにきて』と言った美香さんの言葉から、終了間際に行けばいいことを理解していた。宇野さんは僕のお願いに即答で了解し、今最後の仕上げに取り掛かっていた。

「すみません、宇野さん」

「気にしないで。私に出来ることがあるのが嬉しいわ」

手際よく唇を色付けていった宇野さんは、くすりと笑って髪を梳いた。少し髪質が固いことから、人工のものだとわかる。整えるようにウィッグの表面を撫でる宇野さんに、幼い子供のように微笑んだ。

宇野さんは笑顔に口の端を上げ、素早く口付けた。

「やっぱり何も思わない？」

「…すみません」

「謝ることはないわ。これでわかったでしょ。さて、と」

腰に手を当てて立った宇野さんは、済まなそうな顔をする僕にウインクをして肩を叩いた。

それを合図に、顔を引き締め、手元にある鏡を見た。鏡に映るのは自分本来の顔ではなく、宇野さんの手によって完璧に女性へと変わっていた。淡くファンデーションを塗った肌と、目は軽くマスカラとアイライナーで彩られ、唇は控えめなピンクが艶を帯びていた。

僕の容姿は整っていると言われることもあり、化粧をしたことでそれが際立った。

「有難う御座いました」

「どういたしまして。さ、早く行ってあげたら？」

頷き、履き慣れないパンプスで歩いて行った。バランスをとるのが難しかったが、数歩歩いたところで段々と慣れ、早足で階段を駆け下りていった。

校門から中に入ろうとしたところで、大きな人の集まりが見えた。美香さんの言ったとおりだ。ここからは見えないが、中心にいるのは神威さんだろう。彼目当ての生徒ばかりではないだろう。彼の近くにいると予想される啓さんと美香さんも人気があるだろう。その人数も加わって人数が把握できないほどの生徒数だった。

「うるさい」

神威さんの声が微かに聞こえた。それを合図にざわめきは途絶えた。

一瞬の静寂に、彼は言葉を続けた。

「邪魔なんだよ、退け」

彼の命令に、生徒は従った。

王のような気高さで、見る者全てに影響させる。誰も逆らえないようだった。アイドルのファンの心理か、彼に触れた者は他の者から何をされるかわからない、という恐怖に駆られたのだろう。

彼の近くにいた者は少しずつ離れていった。細く空いた道は校門に続き、神威さんは堂々とその中を通った。神話のような光景に、啓さんと美香さんは誇らしげに神威さんを見ているのが見取れた。

一直線に出来た人の列の最後に立った。

「……夏目さん」

神威さんの声に、につこりと微笑んだ。色付いた唇が柔らかい曲

線を描く。ざわりと風が吹き、髪が靡いた。

「卒業、おめでとうございます」

意識して少し高い声を出し、手に持った花束を差し出した。小さなブーケになったそれは白を基調としたもので、小柄な花数種で構成されている。

神威さんは早足で僕の前に立ち、間を置いて抱きついた。間にある花が潰れる感触がする。

「夏目さん……！」

力強く抱きしめる神威さんに、ふっと表情を緩めた。生徒の視線を集めていることはわかったが、今の自分はどう見ても女性に見える。だからこそ、彼のしたいようにさせておいた。ここで恋人だとばれても、彼に支障はなかった。年上の女性の恋人と認識される。

神威さんは拘束する腕を緩めず、顔を上げた。

「なんで来たの？ それにこの格好……」

「来たかったから、じゃ理由になりませんか？ この格好はそのためのものです。あなたの卒業式だから、来たかった」

神威さんに顔を寄せ、くすくすと笑った。パンプスを履いているため、彼は見上げる格好になる。しかしそんなことは気にせず、彼は笑い返した。

「最高の卒業式だよ。夏目さん、行こう！」

拘束していた腕を解き、彼は手を取って走り出した。後ろから美香さんと啓さんの声が届いた。

静寂の中、二人の声は響いた。

「真弓さん、ありがとう！」

二人の重なった声に、神威さんは走りながら花が咲いたように笑った。

どんな花に譬えても、それ以上の彼の満面の笑顔。二人は手を振った。神威さんはそれを見てから、少し後ろについて走る僕の顔を見た。

何に對しての感謝の言葉なのか、はつきりとわからなかったが、

今は関係なかった。掴まれた手を握り返し、彼に笑いかけた。噓は混じっていない、本来の笑顔がそこにはあった。

大勢の生徒の騒ぎ声を後に、息が切れるまで走り続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0142p/>

硝子の殻を破って

2011年1月2日10時40分発行